

放牧肉用牛シンポジウム講演者プロフィール



座長：萬田富治氏（一般財団法人生物科学安全研究所顧問）

長く国の草地関係試験場で研究を続けてきた日本における草地畜産の重鎮的存在。長年にわたり実践的畜産技術の開発指導にあたってきた。常に現場を意識した氏の姿勢に共感する人は多い。退官後も精力的に自然循環型の家畜飼養の普及に努め、最近では畜産による被災地の復興支援に尽力している。



永松英治氏（永松牧場、有限会社富貴茶園代表取締役）

大分県で茶園を営みながら、裏山に肉牛を一年中放牧させて肉用の子牛を生産している。肉牛を飼う経験はなかったが、畜舎や機械に金をかけず、出産後も親子放牧を行うなど従来の飼い方に縛られない独創的な飼育法で通常の1/3のコストで子牛を生産している。



後藤貴文氏（鹿児島大学教授）

輸入飼料に頼らない国産植物資源をフル活用する次世代型の牛肉生産システムの開発研究を続けている。動物の本来もつ代謝プログラミングというシステムにより、牛の体質を太りやすく制御し、放牧や牧草を中心とした粗飼料を活用して適度な霜降り肉を生産する研究を行っている。QBeefの開発等を通して、日本で牧草牛を育てて赤身肉を普及させることをモットーに日々奮闘している。



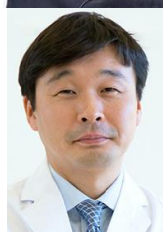
小笠原英毅氏（北里大学獣医学部附属フィールドサイエンスセンター八雲牧場助教）

座長の萬田氏がかつてセンター長として指導していた八雲牧場の中心的推進役で、350haの広大な面積を利用し、化学肥料と農薬に一切依存しない飼料生産を行い、肉牛を放牧することによって「北里八雲牛」（登録商標）を生産している。放牧肉牛生産を八雲町内にも広め、北里八雲牛を八雲町のブランド牛にと地方活性化に取り組んでいる。肉用牛では先駆的に有機JAS認証を取得し、自然循環型畜産の典型を実践している。



千葉祐士氏（株式会社門崎代表取締役）

岩手県一関市に本社を構えて牛肉ブランド「門崎熟成肉」を展開。食を通じて東京と一関をつなぎ、地域創生や地域活性化に尽力している。現在は「門崎肉用牛」の牛肉販売、卸・食品加工、都内11店舗、岩手3店舗の運営、飲食店運営のサポート事業、牛肉の啓蒙活動などを行っている。



斎藤暉三氏（医師、日本機能性医学研究所所長）

トータルアンチエイジング理論を確立し、「機能性医学」の普及と研究を推進する「日本機能性医学研究所」を設立。また、「食で日本を健康にします」をモットーに「日本ファンクショナルダイエット協会」設立にも尽力、さらに、スーパーフードとしての牧草牛の普及を目指して牧草牛専門精肉店「Saito Farm」をオープンするなど多方面に活躍している。



田中一馬氏（田中畜産代表）

兵庫県美方郡で但馬牛の繁殖牧場、精肉販売、削蹄業を営む。幼いころからの動物好きが高じて牛飼いを起業、放牧で仕上げた自家産但馬牛を「放牧牛肉・放牧敬産牛肉」として全国にネット販売している。「放牧牛肉」は子牛の時から肉になるまで草だけで飼育した牛の肉、「放牧敬産牛肉」は子牛生産を引退した母牛を放牧で仕上げた肉です。